

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32688

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06668

研究課題名(和文) 児童養護施設におけるネグレクト児の心理的回復プロセスの検討

研究課題名(英文) Psychological recovery in neglected children living in a child welfare institution

研究代表者

菅野 恵 (KANNO, KEI)

和光大学・現代人間学部・准教授

研究者番号：80760743

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ネグレクト児(N=13)の心理的回復プロセスに焦点化し、児童養護施設での支援経過を検証した。支援スタッフへのインタビュー調査などを実施したところ、心理療法導入時の児童の課題として、「会話が続かない」「表情が乏しい」「自己決定ができない」「警戒心が強い」「感情の起伏が激しい」などの用語が抽出された。回復プロセスの例として、「遊びを通して表現できるようになった」「怒りを表出できるようになった」などが示された。よって、心理的に回復することで自己表現できるようになる一方、生活場面で怒りを表出するなどの新たな課題を引き起こす可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：With a focus on psychological recovery, this study evaluated the outcome of support care provided to neglected children (N = 13) living at a child welfare institution. Support staff were interviewed at the start of psychological therapy. Data analysis extracted “unable to maintain conversation,” “lack of facial expression,” “lack of self-determination,” “strong wariness,” and “intense emotional instability” as problems among neglected children. Subsequent interviews conducted during the process of psychological recovery revealed “able to express emotions through play” and “able to express anger,” suggesting that psychological recovery promotes self-expression. However, this may trigger new problems such as being unable to manage anger in situations of everyday life.

研究分野：心理学

キーワード：ネグレクト 児童養護施設 心理的回復 アタッチメント

1. 研究開始当初の背景

(1) ネグレクト児に関する研究の概観

ハイリスクと判断されるようなネグレクトの重篤事例は、主に児童養護施設へ入所することになる。世間では身体的虐待の問題に関心を向けられやすいが、実は児童養護施設へ措置される児童の約7割は、ネグレクト(養育放棄)を被っている実情がある(厚生労働省, 2014)。

Eriksonら(1989)の縦断的フォローアップ研究によると、ネグレクト体験を抱える児童(以下、ネグレクト児)の脆弱性として、認知能力、学業成績、クラスでの行動、個人的・社会的交流などの問題を明らかにしている。また奥山(2003)によると、ネグレクト児の特徴として、感情の極端な抑圧、衝動性などの特徴を示唆しており、児童養護施設へ入所した後に課題が顕在化することも少なくない。

(2) ネグレクト児の心理的回復プロセスに着目した研究の少なさと、生活場面を含めた検討の必要性

ネグレクトの重篤事例が児童養護施設へ入所することを考えると、児童養護施設におけるネグレクトに特化した研究は少ない。わずかな研究として、坪井(2004)によるネグレクト児の心理療法を検討した一事例研究がみられ、事例の積み重ねによる効果検証が課題とされた。そこで申請者はネグレクト児の心理療法の経過と家族状況の変化を比較検討した一事例研究を複数行い、心理的回復プロセスの一端を明らかにしてきた(菅野, 2011; 菅野, 2013; 菅野, 2015)。

(3) 申請者による研究の成果と今後の展望

申請者は、児童養護施設における一時帰宅を通じた家族との交流に着目して研究を行い、一時帰宅中のネグレクト状態に陥る複数事例を明らかにした(菅野・遠藤・島田他, 2007; 菅野・元永, 2008)。その後、家族再統合プロセスの研究を通して、児童と家族の心理的動揺の比較検討を行った(菅野・渡部・安達他, 2008)。近年では、ネグレクト児の長期的な心理療法の経過を検討し、家族の現実に直面しながらさまざまな葛藤を乗り越え家族を受け入れるようになるまでの親子関係の変化について検討してきた(菅野, 2011; 菅野, 2013; 菅野, 2015)。しかし心理療法の一事例研究では、心理療法場面の報告に多くの比重が置かれているため、児童養護施設の生活場面を含めた心理的回復プロセスを検討する必要性が課題として残された。

2. 研究の目的

(1) ネグレクト児の実態に関する質問紙調査

まず、ネグレクト児の実態把握として複数の児童養護施設の職員に質問紙調査を実施し、ネグレクトを主な措置理由として入所してきた児童を明らかにするため、入所に至る

前の生活状況、入所後の児童の経過、支援の困難度などを明らかにすることを第一の目的とした。

(2) ネグレクト児の心理的回復に関する面接調査

次に、児童養護施設内で心理療法を実施したネグレクト児の事例を抽出し、児童を担当している直接処遇職員と心理療法担当職員に対して面接調査を行い、主に中・長期的なかかわりを通じた児童の心理的回復の状況を明らかにすることを第二の目的とした。

(3) 心理的回復プロセスの検討

さらに、生活場面と心理療法場面の両側面からネグレクト児の心理的回復プロセスの検討を行うことを第三の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 平成27年度の研究計画・方法

(ネグレクト児の実態調査)

対象

首都圏にある2箇所の児童養護施設へ入所する児童116人を調査対象とし、児童をよく把握する職員に対して質問紙調査への協力を依頼した。

調査票の内訳

調査票は、申請者が施設へ出向き、配布、回収を行った。調査票の質問項目は、入所に至る前の生活状況(ネグレクトの有無の判別)、入所後の児童の経過(主に施設や学校への適応度、対人関係面、家族との交流状況、支援状況等)、支援の困難度などの記載を求めた。

分析方法

分析では、単純集計やカイ二乗検定などを行い、統計解析ソフト SPSS Statistics Standard Grad Pack 23.0 を用いた。調査票の回収率が低い場合や、十分な情報を得られない調査票がみられる場合、調査票への再入力依頼を直接行うことも検討することとした。

倫理的配慮

調査票への記入を行う過程で、過去の児童とのかかわりを想起することで心身の不調が生じた場合、ただちに記入を中断し、フォローを行うなどの対処を告知することとした。

(2) 平成28年度の研究計画・方法

(ネグレクト児の心理的回復プロセスに関する検討)

対象

平成27年度の研究にて調査対象となり、ネグレクト児と判断された児童13人を調査対象とし、児童を担当する直接処遇職員13人、心理療法担当職員5人、合計18人に対して面接調査への協力を依頼した。

実施手順

限られた時間を有効に使用するため、事前に調査対象児童について想起してもらった上で自由に語ってもらうようにした。その後、申請者が作成したインタビューガイドに基

づき面接調査を進めていった。質問項目は、担当した直後の時期、児童の支援に行き詰まりもしくは停滞が生じたと感じた時期、支援者側に陰性感情が生じたと思われる時期、児童に心理的变化が起きた時期などに分けて尋ねる。面接調査の内容は、事前に許可を得た上でICレコーダーに録音する。

分析方法

ネグレクトの類型やネグレクトに至った経緯の集約方法として、KJ法を参考に半構造化面接による会話を分析した。まず、半構造化面接での会話（音声記録）を逐語記録化し、データを切片化し、カテゴリーにまとめて名前をつけた。ネグレクト児の成長と新たな課題については、ネグレクト類型の上位3項目のうち重篤な事例を選定し提示した。

4. 研究成果

(1) ネグレクト児の実態調査

基本的属性として、116人中、53人(45.7%)にネグレクト歴が確認された。平均年齢は11.3歳(SD=4.12)、入所時の平均年齢は7.27歳(SD=3.72)であった。

ネグレクト群(Neg群)は非ネグレクト群(Non-Neg群)に比べて一時帰宅の実施において有意に少なく($\chi^2(1)=5.59, p<.05$)、親の生活保護受給ありにおいてNeg群のほうが有意に多かった($\chi^2(1)=5.02, p<.05$)。一時帰宅中の再ネグレクトが懸念され、親の経済状況のゆとりのなさも影響し、実施に慎重になっている可能性がある。

また、施設内心理療法において、Neg群はNon-Neg群に比べて実施していないケースが有意に多かった($\chi^2(1)=8.82, p<.01$)。Neg群の中には、個別支援につなげるに至らないような問題が顕在化しにくいケースが存在すると思われる。

ネグレクトの類型化の結果、13カテゴリーに分類された。子どもを深夜外に放置する「子ども放置型」が最多の17件であった。同じく、「家事困難・放棄型」(食事不十分・非提供)が17件であり、うち「不十分」が15件を占めた。親以外の他者に育児を任せっぱなしにする「丸投げ育児型」は、12件中、子どもに他のきょうだいの面倒を任せるケースが9件を占めた(Table1)。

Table1 ネグレクトの類型

ネグレクトの類型	件数(%)
子ども放置型(主に深夜)	17(26.2)
家事困難・放棄型(食事不十分・非提供)	17(26.2)
丸投げ育児型	12(18.5)
教育ネグレクト型(不登校)	8(12.3)
家事困難・放棄型(入浴・洗濯)	7(10.8)
深夜徘徊型	4(6.2)

ゴミ屋敷型	3(4.6)
路上生活・車中生活型	3(4.6)
親行方不明型	3(4.6)
安全面の不安(自宅の鍵がかからない)	3(4.6)
外出制限(軟禁・監禁)型	2(3.1)
医療ネグレクト型	1(1.5)
自宅立入拒否型	1(1.5)

()内はネグレクト児全体に占める割合。複数回答。

ネグレクトに至った経緯では、「母の深夜外出」が14件と最多で、詳細は外出理由不明7件、異性交流7件であった。次いで、「親の就労」によって育児ができなくなったケースが8件であった。他には、親の精神疾患(5件)と続いた(Table2)。

Table2 ネグレクトに至った経緯

ネグレクトに至った経緯	件数(%)
親の就労(日中・深夜)	8(12.3)
母の深夜外出(外出理由不明)	7(10.8)
母の深夜外出(異性交流)	7(10.8)
親の精神疾患(主に母)	5(7.7)
親の服役による養育者の交代	5(7.7)
母の精神的不安定	4(6.2)
養育者の体調不良	4(6.2)
養育能力の欠如	3(4.6)
生活環境不安定	3(4.6)

(2) ネグレクト児の心理的回復プロセスに関する検討

調査対象者116人について確認するなかでネグレクト群に9人分追加されたため、62人分を分析対象とした。自由記述内容をカテゴリー化したところ、「対人関係」に関する内容が40件と最多であった。内訳は、対人関係トラブル(3件)、コミュニケーション力の低さ(3件)、同世代が苦手(3件)などであった。反応性愛着障害に該当する内容16件では、対人距離の近さ(8件)、警戒心の強さ(2件)などの内容を含んだ。次に「感情表出・態度」が40件、「知的発達」は21件と続いた(Table3)。ネグレクト児の入所時の課題としては、対人関係の課題が最多であり、反社会的行為の件数を大きく上回っていた。また、反応性愛着障害や発達障害に関連する内容も多く含まれていることが明らか

になった。

Table3 ネグレクト児の入所時の課題 (n=62)

内容	件数
対人関係	40
(うち反応性愛着障害関連)	(16)
感情表出・態度	33
知的発達	21
反社会的行為	11
その他	33

複数回答あり

ネグレクト児の心理的成長と新たな課題の代表例を3事例抽出し、Table4に示した。事例2では、心理療法場面で表現方法を身につけることで生活場面でも徐々に訴えられるようになってきているが、3事例とも言語表現の不十分さから対人関係に支障をきたしていることに関連し、言語以外の表現方法を受け止めることの重要性が示唆された。したがって、生活場面と心理療法場面では構造もアプローチも異なるため、担当職員間で情報提供を行いながらわずかであっても児童の心理的成長を共有する必要がある。

Table4 ネグレクト児の心理的成長と新たな課題(代表例)

対象児 (入所年 齢) / ネグ レクト類型	児童の 課題	成長 / 新たな課題	
		生活 場面	心理療法 場面
[事例1] 7歳男児(2 歳7か月) / 子ども放 置型(母親 の朝帰り)	反社会 的行為 (乱暴 な言 動)	言語のコ ミュニケー ションがい くらか可能 になった。 突発的な 暴言・暴 力が今も 出る。	甘えを出し やすい女性 職員には怒 りをぶつけ ておもちゃ を投げる。 切り替えの 悪さが課 題。

[事例2] 11歳女児 (9歳) / 家 事困難・放 棄型(食事 不十分)	対人関 係(異 性との 適切な 距離の 取り 方)	不定愁訴 が少し増 えた。 適切な 距離の 取り 方)	遊びを通し て発散し、 好きな音楽 で言葉の代 わりに表現 することを 身につけ た。弟との 関係性が課 題。
--	---	---	--

[事例3] 11歳男児 (8歳) / 丸 投げ育児 型(母親が 家事を兄に させる)	対人関 係(過 度なス キンシ ップ) る。	運動など 得意分野 で発揮で きるように なったが、 言語表現 や内省が 苦手。理 解力や場 を読む力 も弱い。	体を動かす 遊びを通し て共同作業 を工夫する と、励ます、 労うようなや り取りが出 てくる。面接 が終わった あと、穏や かな様子。
--	---------------------------------------	--	--

< 引用文献 >

Erikson, MF. Egeland, B., Pianta, R.: The effects of maltreatment on the development of young children. In Cicchetti, D., Carlson, V. (Eds.) Child Maltreatment. Cambridge University Press 1989 579-619

奥山 眞紀子、攻撃性と脆弱性—不適切な養育をめぐる—、児童青年精神医学とその近隣領域、44(2)、2003、148-152

坪井 裕子、ネグレクトされた女児のプレイセラピー、心理臨床学研、22、2004、12-22

菅野 恵、児童養護施設におけるネグレクト児のプレイセラピー—家族に対する感情の変化に着目して—、日本サイコセラピー学会雑誌、12、2011、77-85

菅野 恵、反社会的行動を繰り返すネグレクト児への心理療法—児童養護施設での継続的セラピーによるコーピングスキルの獲得と親への葛藤の克服—、日本サイコセラピー学会雑誌、14(1)、2013、87-97

菅野 恵、援助希求行動としてのシグナルの弱いネグレクト児の心理療法—児童養護施設での8年間のセラピーを通して—、日本サイコセラピー学会雑誌、16(1)、2015、129-135

菅野 恵、遠藤 啓子・島田 正亮他、
児童養護施設における「一時帰宅」および「宿泊交流」に関する調査報告、平成18年度植山つる児童福祉研究奨励基金助成研究、2007、全74頁

菅野 恵、渡部 暁恵、安達 祐美他、
児童養護施設における家族再統合プロセスに関する質的研究—退所児童の検討も含めて—平成19年度植山つる児童福祉研究奨励基金助成研究、2008、全24頁

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 件)

菅野 恵、島田 正亮、児童養護施設に入所したネグレクト児の実態調査—クロス集計を中心に—、日本心理臨床学会第35回大会、2016年9月5日、「パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)」

菅野 恵、島田 正亮、ネグレクトを受けた子どもの行動特性に関する質的研究—児童養護施設入所時の課題に着目して—、日本学校メンタルヘルス学会第20回大会(日本精神衛生学会との合同大会)、2016年12月10日、「一橋大学(東京都・千代田区)」

菅野 恵、児童養護施設への入所に至ったネグレクト事例の類型化の試み—要因の検討も含めて—、日本精神衛生学会第32回大会(日本学校メンタルヘルス学会との合同大会)、2016年12月10日、「一橋大学(東京都・千代田区)」

6. 研究組織

(1)研究代表者

菅野 恵 (KANNO, Kei)
和光大学・現代人間学部・准教授
研究者番号：80760743

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

島田 正亮 (SHIMADA, Masaaki)
杏林大学・医学部・助教